源氏大繩

首

部類 物語
函號 三架 二二五
書名 源氏大繩
冊數 二

渡邊千秋藏

源氏大繩之事

光源氏とゝ〻ハ紫式部の書之給ふ紫式部
ハ右大臣をかゝ縁組を尋ふ村上天皇姫
宮子内親王と中女御一条院の后時
上東門院の后ゝ生ふ給ふ双帝を
后かゝ姫宮ハ中宮ハ上東門院紫式部
をかしゝ上洛して細を尋ゝ紫式部か
ゝ宮屋行ハ源宮殿ゝいとゝ世ふ行て
さゝれなかつゝきを双帝ハ幸ゝ
双紙とおもせゝれ姫さゝを彩くはゝて

渡邊千秋藏

まいらせ給へといてうこの時上東門院さまハ世
新く作りつかせたまふとも作りなを
ゆかれさまをつくりてあけ給ふ花とおぼしめし
給ふを時わけうの人々ハ女房とも一条院の
御時紫式部なりしものこれをこそ女人なる紫式部
和泉式部赤染衛門右馬内侍清少納言枕草子
更級の人々ハ皆紀貫之紫式部伯
うけて双しを作り世をうたはふ右近ハ宗祇
さ行んでいさしらつゆのてふをたはむていうる
おもしろ物哀書のあはれ天ハ系てこの世界ハ眼

前ふ畫と絵ふ下白をいむしい行ふ時女房の
美しく御室殿の四より十二の人名ん心の内ふ
をとつさ行て紫式部此詞を思ひ出せり此
詞の心をあんするふ空仏中の三祈之ことをせん
ゆれを三祈一祈の法花経ないやしをとをせて
和國ふ風儀ふまる世作ら〳〵きれと思ひ〳〵ふ
されいあるを事ハ法なを事ハ世のをきまを事
ふ事ハ王ハ思代の事之るをさるハ祈りの
世をふ美のうさをしといて世ふ心ふ一祈ハ
美ふりと云心美をハ天のうさをしといふ

るれども天台宗こそをいふ也とおもはさるこ
これ又若さかくのごとくいふる所事こ
一法花経のないしやうとなふるはかりはすこ
と思惟するとき法花経の中に王こそ他
王の事といむしとこそ王のいとなるく
いとなるこそ仏菓事こ也むしこ王の事なり
されは王の代の事ならかくは始法華経の文字
をはしめ八ぶ八ぶ法花八十八ぶ八ぶよりこそ也むしこ仏
八十八ぶよりくこれを法華八十八ぶ八の巻と云
て六十巻こさされは天台又六十巻こ限て云ふ

とてをしめの巻を桐つかといふこ若云ふ
源氏八帝ふより名をつくるとおもう事也仏
て名をはるるとあるこ巻をはさふ巻あるは大
内ふさうつかとしあ沙汰あり巻を滝巻
会とも云こ内裏よりあつのつかを桐壺利壺
雷巻壺 桐壺こ桐壺といふつかをきりと桐
壺の余をこれをそこるくきこ雷巻つかいかん
なりの時御門この巻よりたかこ

巻之次第

一 桐壺　二 帚木 空蟬 夕顔
三 若紫 并 末摘花　四 紅葉賀
五 花宴　六 葵上
七 榊　八 花散里
九 須磨　十 明石
十一 澪標 并 蓬生 関屋　十二 絵合
十三 松風　十四 薄雲
十五 槿　十六 乙女
十七 玉鬘 并 蛍 篝火 常夏 胡蝶 野分 御幸 藤袴 真木柱 螢 梅枝

十八 梅の枝　十九 菊袁葉
廿 若葉 此下ハ女樂と云事ニ　廿一 横笛 并 鈴虫
廿二 柏木　廿三 夕霧
廿四 御法　廿五 幻
廿六 雲隠　廿七 匂兵部卿 此并 紅梅 竹川
廿八 宇治 此并 一 橋姫 六 東屋
二 椎ヶ本 七 浮舟
三 総角 八 蜻蛉
四 早蕨 九 手習
五 宵宮 十 夢浮橋

一 桐壺乃巻を第一の巻とする心ハ桐を法身菩
鳳凰を鳥乃王なるゆゑに此本ハ宿する仏大唐よ
くい堯舜の御代とて賢王の日にてハ延喜の
御帝を賢王と崇する之ゆゑに桐壺帝と
崇るけなり第一の巻とする所なり
一 桐壺ハ此更衣をたいせつにせらるゝ所あり
よ此女御后ニ此姫宮のごとも更衣を心ゆ
ゆゑ此とり行ひ又宮乃ひとり行ひ
おとたるのゆゑ来和恵摩そいよ〳〵神妙
たゝしまゝ此九御門いよ〳〵ひてらあんゆを法内

王子市誕生まこれ二乃宮之一乃宮ハ弘徽
殿のにくみ給ふ強よこの宮うつくしくて世
をひなく紀乃よ光ぬ公も光宮ともやうな
これ源氏の君なり

一代君を桐つぼの更衣腹ひとつ三年の市附
俄よ更衣不学ひ世をゆつとつて
給ひ給れもまるしてゆ愛よれ
乃よ内裏と出のひとり市母の所ます御
内裏とおのり附君ふ出るとれしを
君もあり給れよ物ぬ君の左さ東よ

宗せまいくせのふ東の宣旨とを出て
ひの高しと更衣内裏市出ひ附君を見
源となうして市ひうるさよ ○かさりとてひう弱乃
ゑれしきにいかまかしたハ命之なを いまわしきハ
生きたといふ泊之母してかれ之志りれも
宗しを三宗なれハ志りしのハ市門の荒傷
かさりなきれりこれハ美の宗之ハ小るく秋
なれハ祖母乃宗君市ひ市門荒
つうをしの宗を ○宗撫子高砂むすぶ風
乃花よ小萩ふ宗と思ひとやれ 世をと

凡そ天皇天の下の母儀となるべし世一ゝ
○あゝ花風ふせきとうけの枯しなぶ萩うめそ
ちつちるる花　沛をかさしらんいなてを
きくゝきれと女とせむ楊貴妃のさうをを
玄宗皇帝なけ花すふよはせめて方士といふ
ものあらはをつれをきゝとれ忘れ行と
せんそ沛欲よ　○きつもまるしをる
つてふゝもをのうゝをそとる俗く
天武の母　若君の孫　孫氏の祖母
沛母いこるゝ若君をつれ中四裏すゝをを
沛門ゝあつゝかゝきてんの伝よさうをのとく

生長をくと作法を伝ふるの子八一の子と位つ
けます西さい伝のことゝたるこきとゝたまをそ
沛門子細をゝゝ伝ゝきゝ仏学の名さゝはとそ
そゝてをふ七歳八時多をしゝとて学をを
させをゝ越ゝ学をを上中下の三根を
上根八七歳中根八九歳下根八十四歳より学をを
初めをり十ゝ小みをゝをそ十六より大学ふ
入学をを三年ゝ一通つかくし十六年ふかし
学伝八三十ゝをゝやゝとこゝうつふ年
一二乃巻を　第末者んしのさゝふ此をを学

すゑつゑ上乃ぶ殿とて世の名
ぶとすることれゝやうて尺とて衣の名ニ乃ぶと
節ゆとゝふたゝ奇よりもつとゝ名とつゝこ世ぶ
しりよ西夜のこなさゝかと事たこれ伊事
ふりたこるとゝれハ中四裏ゝ京てて沼伊
ゆとたゝ以乃中将右馬助茂の武部巫ゝ殿上人
糸あつまつゝ西夜乃つれゝよ弟んしとゝなくさ
やさんとて人の形くとかゝるゝ時人ふゝ
女房のこれゝ大事也女房よハ上中下乃ふゝと
かゝゝ出して先以の中将中あゝ心と

うけて通ふ女房のゝ沼せゝさし知ゝもの
女房猴姫ふゝ知ゆるゆるゝ茂ゝ
こ奇と涙こゝてしこさゝて持せて我いゝ世
以ゆ○山賊乃姫用あゝもゆゝゝ以れと
ゝけ上姫子の家此奇ゆゝ女とゝてしこと
ふこ沼ハ十七乃ぶふゝて玉琴といふゝ
以乃中将の相沼こゝ先んしのさせゝこあふひ
の上乃先世源氏一ゆふふさせゝゝ云ハ此人ぶゝ
一人ゝこれハ上の形こ右馬助茂武新巫の有
ゝゝよ我ハ侍士の女房ゝ沼とかけゝ

かなふ時は我侍業の門に家かよを出ぬ
かれいたしてよそめしてゐて時行の所なりい
すやといふ腰痛をるはさしてさくて紙乃
さうやくをふくしてゐるれよりのはやとい
仍奇をつかせて○さてうふのつまひをけき
メくれよ元るますくわといふあやるこ
如房上一○あふへとの夜をし他こてなる
るゝ元るまなとうまゝゆうこ
此巻を方違と云事をこれい者しかとち
のひをしのて正月之むらしの上鶏の巻の

かりまよかとちひをせりちるふんしあれ
このなる侍乃所と云のの家ふとちし
をしのてもいよのすけう童よ毎をこ川ふ業
位るとたしるこふれをけつうにこれをむ
のよ物こひ物ふ侍を物をれとのかりて志かり
せりその間ようちをそとをしらゝあゝ侍乃所
うめ房義人をりしてをのひとめ房
のうるとうとうけれをれをんもひひ
とけねうまむし○第あ体ふををして
そのうをや道よあやるくまといかるの如房

迷し　○かたきうち鳩か屋に生る名はかふ
けいせいにあるは見ゆるそくして　露路に住む
る所にありさるせといへる女敬ゆへに木の葉をと
るあくと云也鳩か仕の助女房をふたひ
蔵か仕組とも　あひ組は討た仕舞ハ二度めの
鳩ところふ　伊与助か女房のおとくハ小宏と云
すめのうり見とらし知ては　はうひ組かこの家
とはられも見ぬたの小宏に伝羅を入れ
やうを伊与助か女房をかとはれはちきうける
すめも我ときらいて　伊与助にはなしと云て

かゝのとく多くうりて小宏にみをとらかし
まへの我宿に満座よいふか小宏ととられすり
さられども立て　といとりてなるこて後　伊与助ハ
いれかへおれすり留すれ小宏よさとかりとかり
しゆんし同車よしても組りさ宏小宏あまの
ねところとうんせまひろせころ行かてまむすめと
基どうちていくりむすめをかめてハよくいあれ
ともなりかろうおとれりむふ祝すとあけておらす
このむすめ十二十卅四十とくさむてすゝめり
こてふらく継母のいふ振ハあくそしるや伊与の助

の湯をとりこむ人多し方寸の奇に△
伊予の胸肩掛けさいらいにて
よすがに見うるらむ 伊予の湯けふ六百
卅ぞと上ようしようちさきゆて金さ此わと云也
うくのとくやうやくをてとめ女房姿しる
ところ思ひてれ入おわるといきゆ〜薫して
このようをおひよ南んしと抱してをて
さる色ふをみて人の出るようをみるとを
おかつうるく云ひなふよあむ此こゝはけて
なすこまま伊予湯の薪うを

好みふなり好ふりんし奇はうをしのふを
これをつきの日はとるう ○ほのふものの紀の
おさふむすをふを歌のかふ行をうけまし
この奇加よまし むあと彩をおさはを
出来事よ ○かのかりに風にけるを粉地
なりをしをよむすわれ 此人をしのとく
おわしかさをを地をを一夜のちきり
なり伊与の胸女房をいすこしとはれ給ふ
一ふの巻のなりひふを悔と云を伊与胸女房
をををををぬきすをしぬけたりこれをとる

とりてはらへかはりてあるゝ小屋のようなる世て奇
とゝはとへゝ云ふ　○西禅の兎とうつて
なる事のようなをくの霊のなつかしさなる
おの奇なるこゝろの巻とうつせしとゝ
なるこゝは旅ゆへよく伊与し肥の如房とも西禅
と云也如房也　○西禅のをふとく霊なる
かれるゝ三のひるまぬ神の事　折ふし
芭の姿なれば兎のはけうるれいせこのはけ
るゝよたとへるゝよるゝ又うつせこの伊与肥
とつれるゝ伊へとゝ旅と詠してゝんしへ

まゝ也　○とゝねとるゝとゝとゝてな
ふるふるゝとりかなるゝ
ゝんし堅　○西禅の世ゝうきものゝ
ゝをふしとすゝふとのをふよかゝ旅のちよ
一幕ものゝ
この世とゝるゝ
ゝ事の旅ゝ
とゝふゝ
ゝ
ちゝ

三のひめぎみとハ申すとそと云ふ六条院
こゝやをとて六条ひがしの院なり今ハ西
三位殿とぞ申すもとゝ西ひがしの廂
なりふのこゝやすをなをなふたりの人をとりかた
せんていの宮二の王子桐壺の住王六十九代の天皇
御門のおもせむかしのこゝの御門をおもしき
せむかゝをれかゝれあつく後家ゆゑ一人れい
しきぶゝふ女子一人おいしまたせむていの
御子ゆゑ三のひめ梅つぼの如御門をやしなせんてい
のれ出家ゆゑ後帝子院とゆゑ寛平御

とゝもゆゑ也ゑんぎ法御門のれちなり後ゆ
此御門と伊勢ゆゑ秋ゆゑ名をあらはす上流ゆゑ
なりとゆゑんし六条おほいきまいくせ秋好の中宮と
ゆゑ六のれを六条ゆゑ御息所とゆゑ法御ゆゑ形
やうゆゑんしのものと大貳とゆゑ名をんらくして
六条ゆたをよりなりとゆゑんとゆゑ名
車ゆゑ三ゆゑ家ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ

よなかこひ侍ぬ世ついてよあまれ家よりとりきて
のそひかりもあるを門流をてらんしのの
花をなふのうるとやと御尋あるは法師ぬさ
とついて多くの花こゝろ慨光をめしう
はの花おもてまんれとの花へふれうるかか
の花はあ家より行をこゝを方人よりのかとも
そうふうくさうるそはの花とやとをあれ
ん門より車とあるくるんしとうろて
ちわさ扇のほまいとふこうしうるふかのもを
わさて分ととつうちふんせうを花はよとも

武蔵とまふの世をうかのとをを山人なり
○ふ法はうるよそれうも見は三つ家の門り
と書うるかはを花とうの女房やし
ものを花ふうとと上層の御ものなふ
へうはとまんとをもうんし御流をて
るふるの家とや行はうのとやとひきまは
ふれこつやし門やさしき女房の出入をを
らをのうとやうんし心よくを不かしめてゆき
ものを花ふるり山方かる門ゝ女房をかか
と云をやそうんし山女房ふんとけのふく

三條殿のしよりう世六条殿のしりよう
の時分なりけるとて所出はなし八月十六夜より
其夜より雨もいとちきり降定なんしぬるよ
雨夜の月定めなんとて枕の中將かう降師
のうちかと推し給ふ定さ毎十六日の月はけうと
近くなりて為なくとなりても第つくおと鞠
はくおとりとすると定を六条室町より所々
もと諸人の中なれい法國のとの給ふてさ
うしき物の中山嶽精舎の山伏講とあり
給はせて南無尊師法師勧進尊ゆて唱

此琴と吟ずるとかの有ふしとかく詠
かしつを給ふかいと長せ殿の長れあるさふた
花をえしと反離心子の秋の夕月を詠て
ついるきかしとあるこ天ふかいと比翼の鳥ぬ
ゆ反連理の えたとちまゆ給よを元紀久く
とう羅ひそし 四十六信七子百歳の世まても
不とる反ちきとあるまとあれと
おほしゆして詠給ふ優波寒ゆ
道と云人まて不む世と思ひ紀ちきり多
ふ孔 夕ふか 竝一 極子の母

○さ月の世ちきりうたてのうさぶも未
けゆあたらかさよ　ちらはちまり　ふ海ちう
ちかうしきれよ　曉　車ふりんしとタかれ
上と同ひとうあ　ちりちきるふうしの院元
ほ法出ひ新タかのめと衣をも同車よ
家なりるにうしのめむとひろ大なれて
きうところこちふい恵華生歳ひをさふ
の家ふう紀ているすりほゆことけうこの、
うよ中むひうとき通ふうんし
○ふ一つもかうやうのまとひうんわうまたうは

志のめ月　　タうかのれ生　○山のもも
心もこうう今ちうしたをふてうけとをちむ
なようしの院行ほきうんし　○タはれ
うに花をゆ田こも生をうよえしえよ和を
有うれタかのれ生し　○田うはをとえし
ゆうかの上家ちをそうれときのそ生のう
うをあうしの院と生ととこそといへえ六条
樋口のううれたんのこをうり　正祐を院織の
天王生王よ融の大臣とふ人田ち国生
若不と紀へうつし　てれ紀を屋て

白川の宮　すぎの松山　こやさのみちも
新波の浦なとゝうんせる陸奥の塩竈の
浦とをうつしてゝ　やをぢかるふるのゝ
ゝをうしかとをこひしきそこの塩の事さて
なんしたの浪よ来るゝ八月十六日その夜うせ
吹あれ雷電しきりなるさまを紀貫之
とゝ詠つるゝ歌のすさまじきをかしきを
ていかりなんしとりのかゝるをと云ふくつ
の事を忘るゝところふ鬼のやうなるものの目よ
入て来れるあまりふすさまじさに なんし

これらつとめもとも山元こと云ふくようひまをあて
無をもとゝちるゝてるさゝそをふ神さゝ右をとおこ
せともおれとおとれて　おちて振ゝ口わゝまて
肝魂とゝ云ふるを魂とゝ　ところよりの上見へ
法つ法されいるゝ　中　ゝまして　やゝとなりよ
ゝるをたゝらしゝ事かさりたるきこ　多りかの上も
けこゝのゝのよとゝれ法了ふふゝんし
なゝしりゝゝて　ゝをさゝる事を　宇家
御門のいまゝゝいふ有法りありりゝ
御息法ををれまゝゝ　御出をと紀　延長御門

とこしミやせかゝる事を口ゑひとに伝へらく
むかしの法に来るや其ハさしるのおほしのかんの
たむけかうすりわか意跡されハ寺おもおもして
おらむ示とおこりて当かにと云とられし夜明く
あれこつ中ん家に此事と伝なく久ゝ加の上を
化生のすれとるし世つ添よと伝あるに紫女七歳
とんちかいうくのゝんの下に花厳あるとこれこら
遊ふつらてかくしけぬるにむくきたの御衣もに
まり黒髪をそとへあまりかうれんしたる覧し
ろみそ限とるなせそと伝あれとも花くれ

人とかくのおとゝすら事ふそゆとやすめ
かつけて終るの道わさりの清れと云寺につれて
もゆるつまかくうさふれんし○見ししうはなり
とされとなるむれを拝ふへの舟もかうしきな
されハれんしたる路無常也ゟゝかのよしを
まうれししかることりつきの更衣にもそゝされ
のちにおつかへのよしも此京内よりも到れて
法おもさらるもむすくるう法之花のよく
成人也ぬ花の、とらせそ何家と云事と
さまするしとされんしの伝法と云

一三卷若紫　さしかへぬるこゝろはやうかはる
さつゝしのゆゝしう心ぶかくなりしの事ども
なひとゝ心ゝ賢ありうしかの角ゝはかゝる氣色
光かゝりて宮のとまりもえいて給ふとゝ
ケンジユキクマウセ
所々をもの見ゝ北山へおはしましたり
なれい京に花をさうすれなりも北山
さゝゝ見いまゝさうかふるゝ所をとて花すゝ
中よりかゝるこのをゝまゝ給ふゝ給ふゝ寺
のさまもいとをもしろくなれゝ所のなりし所寺
ゝ海ゝ名とあらはされしてなりしの寺と

云也ゝ家をうゝ山ふかくいわうの中ゝ聖をゝ
なりあり給しこや一日ゝしうしまやおい
まゝらをとうゝ見ゝてゝんなをゝかちまいる
こゝんゝはゝすゝをなるゝ自を不ゝ也
なゝはゝさゝゝかつをゝはゝ海ゝ山との給ふと
今一夜ゝらまゝゝゝ山ゝとゝゝゝゝ海ゝ
ゝのゝゝゝゝ京ゝ山ゝ海ゝ京
也ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ也ゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひとゝせのころ世中さはかしかりし比はらからおほく京
のふるき草あなけれとそこを住はまさに残
見はらにも伊勢によそれたまうつりゐて
伊勢物かたりといふ物をよみなかす事文ともからくちに
まかせ給ふ頃さかのはらへ往ありのかふまし
しらぬ小栗垣すとおもへる所ありなふかし比猶起
此ことゝ聞ゆるなれ猶るりとや世は心をうつしまし人
乃あはれ絶えるふあまりゆかしきてたゝすり
まことにうけ給はれとの給ひしよし語る女房と
花折りて佛にまいらせあなた見たれはりかれ

此三夜のまされにおはれけるひかり御とともにちる
たちてのそきさゝまへ花ははや十たうり此あまりのよし
あはれなる人ともみえ給ふ体見にゑもられまつて
よそいふ女房おとなしくきこふまこそりさて
まつは名のあまる出入あそぶ中に十ばかりなる
姫君のいひいつくしきまへ髪を扇とひろけ
まゝむき給ふにそえしつかにひさまをおはさうる
こちなへ給へること限られに乃給ふといふ
すかのまを吹せこのもとにあなかしきにたゞ
ふかしたるところ花さけるかなはいさしう

ゆくすゑ恋ひしく花人のかさしにせむ山ぶきの
露多き袖しをれてかさなりぬとぞ思ひ乱るる
とまれかくまれつゐにかくれぬ人かとぞ思ひ
乱るる朝夕ものおもはしげなるさまにて人々
ものいひかけ給へるを聞給ひて
ものいひ給へ給へ君こそいかなる
あはれとも思はれぬとおもかさねて
ふるとはなしに雨ゆゑ
かさけまさりぬ君
○ゑれぬるむあるも
ちらぬ若草とおもふ
ものを

なるかの花ゆゑ
○なつ草のおもしろきを
露の光えむとすらむと思ひ
ちらしあるれはかなしすきくしく
ものしてやうしの花
なきふるものを
ものなるさまにて
ものさかりにもとこの
俗部の
なるものを

はとも云事あるべしすべて此君は
うゑへ植て庵をなすべし云々やと
きとりけるいきて活ひ[illegible]
[illegible]
法花經化城喩品云　從冥入於冥永聞佛名と云
文を[illegible]
尺は[illegible]
あま君○新まさ[illegible]
[illegible]
あらと[illegible]

を紀の[illegible]
よさ毎ふ見[illegible]
に[illegible]
僧都　○さし[illegible]
[illegible]
[illegible]
よ[illegible]
共ひ[illegible]
[illegible]
[illegible]

入てすれとる鐵ふいてとる立葉のえさをかけ
多羅陽の市はふ法華経をかさる
つけてなる聖うこと紀をせのと光して御留
多えんし　○えんよ行くかくるこ心掛
風ようさ紀ふきこうもうくる　僧都
○優曇花の花ますらえうんして法山掛ふ
めとうつるる聖を御寺ふとて　燭祐
○おく心の家は戸かとをれあけてまこえ
ぬ花のをとうるる　きう行ん胡信行の
ふうはしてたるこ御あり　○山ふまれ

かのふ花のをとえんを今朝ふかすこのこうそ
ふ月つ行ふ　西ふとしかるとうれうこんりこう
とて紀五尼君　○西ふとうや花のるこ立を
こうう紀ようるるう　をのるこうきとうこを
京へかつて行ふ心ふ心ふ　○西りけを
角をまを紀ふ山ふこうんのうれりとあてこ
ふと　極くての御うるとうにて思ひこて
をうりをへこを花ふ心ふ　○あ
とて紀五　ちがぬまを心とあるる刀とのをうるを　二二日

あまてされこつとはかなし給ふ西郷三の所と
給ておとのありさまと思しくるしとの給へ
きこえいこつハ云給の内よさをかく給ね云ま
なれはしろなさはかりいひけすくみ給ひ
ありさまをとおもひやりれみよハとたまかは
ふかんし　○あさか山ゆきし人とれもいなし
かりて山の井のかけえみるれなも　此わたし
汲初てくやしときゝし山の井の浅き流（ナカラ）や
うけとみるつき　云いれあそひよはきこし

一　翻云い那　此藤左衛門しやく日のこやなやまし

て三のひらさとふいて給ひて上の御こゝろのうり
さひさせ給ふを見らこてまつるハかなしけすく
ひとおしなれとかくる云すにこふと心もあくれ
るかめてうし給よふれハ御心やしる扶きいの令
ふとせありさま給へいいてたゝかりは世蒼の
やかみて見至て給ふさこまうつと大ふ
つねよかやかくるれこし給すれとも南ふ
ことゝきことへ給ひし給ふむそ　ふの山やとも
とうまわしきすり女房蒼の中なりし事と
おかしかるこへ下りしとの御物思ひ給ふ

心うつしとれかせともさしたふるつゝそしら
とけれはそてをしなむと こうあん 面をのの
ゐる事をふまつしてをきはなれと帰てをきをを
はくしとおかしきこと話よりん ○凡てを
まきあふ夜のうちまをりてまさ
をををを動ををれ 四ちつゝのふや出世て
○せうををふくへやはをえむをくををるをうをを
をさめ取をふををををてを 面ををををの姫
君を祖母のあまを君をやををさをらをくを聞て
京ふを帝を活をりをん一ををてをたをををるふ

をのをうをれををををををををををををををを
たまをて ○心ををけをを隔蓬の一ふををををし
よりあををををををををををををををををの姫君
の世を見ををたををををををををををををををを
ふをつをををををは者仕られをををををををを
ををををの出のをををををををををををををを
ゆをををををの活ををををををををををををを
知をうををを云事ををををををををををををを
秘をををををををををををををををををををを
ほをををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを

かくてよつゝて上ふえん紙よりかきひらる陸奥の君
草因に後撰てむらさきの御文のうち入らし
和泉式部のかるか気かくとかきたゝたな
そかつる婚の御 紫式部 小納言のかれと
よるかへの心を寄て和歌のうらに玉藻をかへん
かとそらかれ かくてあまの君かくれそう給
たさかの花人見さひしらんとてつゐふりし
おいしれもえけしあまて後いときり給ひて
姫君とも御ふところにてありしにの奴さ
けりけるかつて後ふよ来て一後ちさきり給ひ

女房のすむ道ふかりかしかなくけたいを給へる
こえつけ給ひし忌日のすいしんし五二つり
をりうらせすふ
そうまた ひもんてすかうこ表いもかとかれ
あきかうけさうをら
内よりよしめらまもはかひ とかへにりとし
まらと海れさくりの羅のすきしくいまのとさ
しをさいひをしとせし 紫の御文ハ奉らつれ
内わよ前代の式アへの御やと申し姫君祖母
ふれられ給へいやられとふなき給ふをなれらん
してむかひとりまいらせむとうしとて給ひ

形態を見ぬすといふ事はまれにそなん
人つゝおりてかまくらの中小の七郎へ
ちゝなるしてかのもの細長の下あるを織ふ
あるまゝしられとも於も三つ四すまし屋の
色翼羽をたゝ活せてをるくてをるを
父ゝ母ゝをしらむ事をうしなひつゝむとの
二日をいつゝ出給ひてあるせつまを
出て知ずとおかしてうつくしかる給ひ
けん

○祇園女房とあるはとゝ

世のゆゝしさを　紫のゝ

かゝいつゝきゆへをもゝ祇園女房の
ゆゝしかるらを問答

○紫の一ものゆへ

の巻を見れはゝむつまじきゝ

この巻をなをひ巻を東摘花となつくを謂ハ
ゝ記ゝこのゝやとゝ人まゝ海氏世ゝ女と人
ゝ立ち給ふ記ゝこちの三ゝ
父ゝ母ゝまゝをゝ給ふ祇園女房を
給ふゝと命婦　二条の院へ来ゝ天皇
給ふ祇園ゝ中ゝ給ふ

琴の上手なりとやうに拍子いま一拍や
奇なりけるらむと作りたる琴詩酒三友
と云ゆへよさ少さう上手なる琴を弾ずらむ
唐かぶく詩和かぶく奇なる有らむ所とのの名へ
是呉國の琴伯酒三友同席にて松竹相対
三友也給るよりて令始とつれて行琴を弾
せてきくむとて所なるよりて面白き
そへうやうやの琴伯酒令始をつれて
やせる云紀行より引しきりて琴ひきせひ
な紀上手なる琴伯酒令始面白き所
ありその夜とまりてそれ琴伯ひちきりとこの
酒をすすめかつ琴をすれば琴
松紀行かとて世尊の顔をいらむあれい鼻の
あらくなりく象の鼻ぶとく鼻を巻むを
三月十三日なるそれ松かーー奇なる
酒つを　○物語さしと先屋との木すゑと張さて
よのつをなる枝を那と見るなとあるして
その先もいと高なりき世尊のくしよう
令始しくしんしーー物まかるせ給て
○くるる夜居り心のつ
けれいそとおもふとおもて

ちりのこ　そのちといそわれれるとこ　去られる
まゝ　りん　出て　○なつ　こうかとも
しふるふ　この正月　おつむ花　とそ　ふれるん
世奇れよの　女房　を　橘花　といふ　まこ　さの名
とを　ほつむ花　とこ　鳥の　橘の花　ふ　おつ　橘　とゆ
つ心　橘の花　ふす　おつ　橘　とゆ
されとも　此人　をれ　日　をかけんとそ　ちつ
いとゝ　ゝ　れ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ら　を　東　の　こ　と　ま　こ　ま　ま　ま　ま　ま　ま
たち　ぬ　ひ　さ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

一四の巻と紅葉の賀とゝ　公家上臈々々
年より　賀　ゝ　事　と　発　さ　る　こ　四　十　四　賀　と
云ふ　桐壺の御門　の　中　の　四　日　ふ　舞　壺　か
さりて　乙　一　舞　と　ま　れ　の　ま　ま　ま　源氏十九の巻
いふも　巌　ま　ま　ち　御　ま　れ　ま　ま　ま　ま　ま　ま
事　な　ま　紅葉　を　か　こ　て　舞　と　ま　ま　ま　ま　ま
うつ　ゝ　紅　ま　と　ま　ま　日　よ　て　ま　ま　れ　紅葉
ち　り　ま　て　ま　ま　ふ　え　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　舞　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
伊勢　木　の　こ　と　く　く　樂　々　々　抑　花　菊　と　ゝ　ま　と

紅葉の姿といふべくもんしせきとけんの大臣
きく菊をとりてうたの加さしふけばたまのや
ゆくうつくしきもの物ちつくの女御は説明るく
ふれとかやく日のこやとやとこ舞は法皮なり
ゆんしの物ちつくれたらむけるときこ法ひてこの
ひよれみとまいるもの奇よ　○　拍あのふよあるまの
くもりはるの神ちかりけりこの三月紀や
日のこやはは

唐人の神ふることはをけ
法とこちのふつけてあれられとはんきに　唐代
玄宗皇帝同后楊貴妃ゆしつる法ふ方士

とふ后ひとりきれるく月をとるさたよりきたる
らるはるをひやんさくまつるとて月をとて
しとうは玄宗と后とふんせやこさてみる
ひ方をんはるよのおとするとこ法をこれを
正月十六日なりせかくをはるふと云ととひは
つい霓裳うういの曲とやはとやはこ
角きよしはるはるはひさちはとて方士夫人
ゆやてはは楊貴妃とまとせや
ゆ玄宗も笛をはそをしはるこの事を
思ひはくんしの青海波舞の神をかくと

おなじ所と云事を揭き記せるなり
八ち云宗なけさのあまをふ方士ふたつをと
杉なもかゝむる天北のこりなく立つるあひて
月文ふて舞の袖と移事をかゝりのふ毛
とゝや覗賞ういの世と意
一始ちつゝの内ないとの紙の賀の時也あれと
桐つゝの御門と称うるとまふとふ
乙丁の御門ふ世内家の内河表文
ちまりて十五ふて位つゝ御ふ世と扶さ
め御ふことい十八年ふ見を手んせい院とゆこ

ゝんしさの所ゝ御誕生の海松をおもてゝ
命始ゝ〻〻〻〻〻とつゝふし御ふ心ふちつゝ
の女御ふ生る世命始心扶てなるこ
○ゝゝつゝんふ三ふ御ちなゝふて家ゝを
まさる松よの花始ちつゝふ世内世
○神ゝゝ家のゆうゝ思ふあもちをこゝまれ
始大和なてしこ
一ふの紅葉の賀ゝ世の手ゝ源内見と云人の
ゝゝんしかよし御ふことれあり世ふ毎
さるふとふゝ御ふ所ゝ世ゝんないふのこゝ文十

ぞ七之　九月のさかりに中宮

一　第六の巻花の宴　是ハ青海波のとき

なり　次の年三月ふ花見の御宴あり　南殿の

さくら咲こぼれて白ひ濃ふ　松も色ふかき形

かゝ　花のもとにあつまりて御袍ひきあく

ぬぎをれて　奇　詠　是又ふの御ひのあり　九月

も　菊　とも　詠ふ　以の中将と舞　屏風　左手

紅葉の　賀　は以の中将　常　よ　屏　花の宴

所　紀　和　歌　くさのあそひ　きて　左方と

九月のつ　紀　まり　詠ふ　とき　此　簾　をかけ

酣月を詠ふかとのふ巌上藤の朧月夜

ちくものいなりと詠し　詠　九月　これを

てかゝ殿　多ちより　て　今　上藤　を　抱　詠り

○　ぬるき夜のかつれとも　月の　れ　かかけ

ぬちきりとて　思ふ

の　九月

○　ちて　名　を　とひ　詠ふ　上藤

詠　て　も　第　の　そ　と　そ　と　い　し　と　や　思ふ

多　の　ひ　ふ　屏　と　と　り　か　か　し　て　源氏　寄　ち　ぬ　心

此　こ　と　す　れ　を　明　の　月　此　行　ま　を　寄　ま　う　て

と　の　ほ　こ　此　世　唐　の　う　こ　へ　う　よ　ひ　ん　し

○梓ういらされ出ぬまゝふる同のえし日は
うけやうるとゝ名しさひしくかゝひをゝふ
さこゝゝ一大事なりぬ此上癖とハれる源
月夜の四侍のうゝとゝ中ハれいこゝゝ歌の女御
此御妹ゝりこゝゝ歌の女御とい富一さいんの
御母源氏の御紙母こゝハの四位のうゝとといしの
高く殿の辰なゝんとれわしめたゝさゝも
朱雀院も是よ出心をうけ給ふゝをこれよ
ゝうてその者ゝゝふうゝゝゝを四侍は
かゝゝ人の大納言ゝゝつけて自位日を要ゝく

云ゝ大ゝさむ言ゝ給ふをこれ出れいちゝう
つかの女御れかゝれを仏之給云ゝりさゝまゝ
とかゝもふり紀之のとゝうあゝよゝうん給人
なゝゝれ給ふまこのれよ四侍のうゝも仏よ
ゝれゝゝゝゝゝ人ゝれゝも一期四位ゝくおゝり
の四侍朱雀院ゝ源氏ゝれゝゝゝ
一六の巻蔡ハれ出をあゝしてい是ハうん
十二月ゝゝ初霞ゝしてえゝしれやゝ行今の
大臣をとり給ふまゝ付の関白ゝさて又やうて
葉ゝうん給ふをれ給て此四二条の関白に

まし西宮川入の大臣を又致仕の大臣とも云ふ
ふねあるひの上はゆ御腰よりゆ御子をゆきうの
大將と名つけなゝ未ゝ人ゝしはあるひの上て
いふいれいし給て長吳のいつれと見ハ名し
かゝの參の新しふきう給ふゆゝあるひの
上と見れのあゝ車とうさう見たとありて
いてゝうら見れしたゆつて又六条の御息所も
源氏の御新使しときて見物のためゝ出給ふ
これ六のひ車と云ふ御息所の車
とあゝ給ふあゝあるひの上は車といふて

を車はけよといふものけさせた御息所
の車なりあるひの上時の関白の北の
方ハ葵の上は車を入るゝ御息所の車は
なゝとおし給ふ御息所
なんゝなゝ思しうんゝ出せしてかゝ給ふ
かゝのまゝの車論とふれたゝのいこんゝて
あるひのとは見ゝいふ御息所の長吳之
はゝ車論の恥辱とふ名ゝとふれさゝ
ゝゝといふ給ふゝよつけてのさゝその時名し
ゝれおきのゝゝの音をつゝし給ふて

御息所　○祇園のこんちとうをきゝて
おつるとうの日のうつるそうき　源氏物語
あさうやの人をぬるとうかゝはうもとはつ
まてぬるさ恋ちと　東論四月あふひ
上の御方八月の比ことゝ懐胎のおもしと
さり乳とうはさむそいうゝ　彩雲あつて雨を
三うれもいはしを色いあむせ若君を俗
サるとうのないれいれたる八月十七日陣間彩
行ゆゝ又の大臣大内（まいりもと一大事り
おとあひしさとうん大内（若さうとうちも

りんしも四つ弱とも死をまうまことに
木のくるけさふさうもうされそしとわか
しりて二七日まをとれ祈ともるふしさて
野辺（おくりをしてを七日の吊ト
りんしの意よ　○さうちのるうとうをれと
とうる○ともを色うをを井のあれるの
さて四十九日のいとかとくをすさて十月のふる
若君を大臣のとこ泊よ木きまいゝせてをれは
二条院（つこう泊ふ　もをこうを
おしこ政仕の大臣以下のめのとをををいう

[illegible]ばかりにて紅葉う[illegible]ちり物哀なるていこそなんし
[illegible]と脱[illegible]ふとき ○浪とく[illegible]ふるまひ
[illegible]れとるこゝろ祇園閑しとあり 哀 此[illegible]傷
の初時 [illegible]し 帝の宮をまゐらせ[illegible]
[illegible]えさとあるもこゝろをつけてさしねさせてこゝ[illegible]
[illegible] ○人の世をあはれときくも[illegible]
祇園を思ひ[illegible]れ 哀 ○[illegible]見
[illegible]しとあり 源の世ふ心れくらむ
[illegible]

一源氏高擶(カウ)はかしこ物ごひをかゝふるまひ
[illegible]の中将参て ○[illegible]時[illegible]
[illegible]紀をといつまのこゝろを紀てなりけん
この[illegible]の中将をあはれのとは見[illegible]
○見しひとの[illegible]とありふしこゝ[illegible]
かさ[illegible]楚襄王のことゝ
とゝ[illegible]こゝろ[illegible]
[illegible]
いつくより[illegible]
[illegible]

言ふ揚言のものとやいと云て世こと面と面と共に
特之てゝいたゝかれたる所なりしも以の中將と弼
世古事　一書に　大きやのうゝへめのうとの
如唐してまゝもゝ弼て大きやと共に参れたるの世
○哀れの歌ふのこれなれしとうしあきた
うゝとを歌へる　○今も見うゝなりゝ神とね
らたれかまかあれゝるやまとなのてしこ
大きやよるとうたし
一　源氏物語に歌ふ紀ゝ二条院へ出おあり
てむゝさゝ件上の髪そろへ毎まふかて

○たりうれ和の寺の庭地清雲寺に松ひ行する
をとれのこそうる四正　○ちい源ともいそう
ゝんさゝのなきこもゝ紀ゝしかの乃ゝ
けゝぬふ　大乃巻そうれし彩まゝゝ
しまゝ紫の上を幼ようやうせられ
親のおとゝおとうしゝかくのおとゝ
ゆへ恥しくれゝしめして祖記に宿に巻
されゝつとまゝ○さて子のとの流せよとのの歌
ゝ成の四より入して実の中よおきて子の日ゝ
りこれゝ心ゝ作ゝしよとひゝと源氏

の法くさうふてあるを尽しと作せりこれか
秘事之惟光屋敷てきこえてはつくさてさて
光源氏三つ一とかるハ三位と一つとハ一つ公卿ふ位
ゑ露を袋よのせて箸をかつきてもち
て糸之一つハ成 女子のさん祝ちろう成
いもよりよりとれかくくちぬるすし女房のため
よりを祝之三字中略と云ハ成の日ちきり
ていとせ一とれきて子の日祝ゆへ
秘事之又腊ふ心桃とれくこ名詮自性と
大唐ふも楊貴妃ます まにところふ心桃とうへ

[illegible]日ちうつ[illegible]を桃花とうす
すなうち三つ一とかるもいとなりの物ふい餅と
無してよ乃祝巻
巻こし花事なれも蓬
の上にかられをてかとれをゆつよをうて
三のひすふ祝語を
一七巻を桃とこれハ六条御息所の女前房也
姫之すむ〳〵ハ源氏の譬るれを者しのいと
こへあ〳〵しのとの死夏ふ公語ふ死人名次
ふを御思しまいるもを名人ふ宗ちこのむ
ふ伊勢の母子たちとふ語をのこを

源氏なりし女の下臥ふす所を副てゆ島原と下
臥ふすとなんしるしてもれかしあさぼ又
むつさねのとるとふはぬ人事とおもひ
ゆ所なる野の文つを行ゆ定ゆ中九月の
十六日のゆとなれいに月ゆくるよりもてこれ行
ゆ秋風死ぶしこむしの琴を枯くうて
人のすこうるるしこれ句を野の家い
火焼屋よふ柴垣もてれなと柏さひくゆ月年
出ぬ行ゆしつくこんん柏いこるれい多いめんあるま
きとゆるとゆるして柳とおりて投入く押く

入ぬ行ゆ上のゆ紀こゆ所ゆ所の奇ゆ ○神ゆ紀ゆて
ゆるゆの柳もなきものをいるまるゆて柳れ柳を
考ゆ所ゆて

○山女ようりかく之いさくこ
そよかもなりうしこと
ゆ行ふかつるさのうに ○あうと紀ゆ所ゆ
いつ日ゆ家紀よこい世ゆ所ゆ穂の家ゆ
御息所ゆて

源氏をまとあてこそれれ

○大方ゆ秋ゆ所ゆ れゆかゆ
こゆ祈ゆきゆこゆ暗ゆの松虫

新古今

精ゆして大内ゆ桑原ゆ天ゆ掃ゆかゆ
御琴ふさゆ行ゆ家ゆ多ゆ所ゆ

御とのの御ぞうなれ
ども心ゆて御とさしあげぶいやふていあやこをいふ
かとてい新院とふ又いつきのみこといふこと
一源氏ものがたりとまことにとめあげてとまるつき
とおぼしめしたるもゆゑあるべきことなり
御裏にはいとゝ系図とさんしたてる二条院
内御前をと殊更ぶんしかとたてる
ゑ出ぶ　○ゆまてすてゝるかいゆくしも
沢秀川八十郎の源ゑ神はわれしみ　御裏に
ゆえ　大は　○すゝ川八十郎の源ゑわれも

いせまてゝ見ぬ思ひおこさん　ゆえ　ゆえ
○ゆくゝゝもなりわもやらんとは秋をお話ゑとゝ
おもふてて　一此ゆえを桐壺の御とかれ
源ゑをゆちつゝの如御をは繁あ御ゆえ
いろめしてれ歌ゆゝかうるさは芳院とも御ん
ころゑとゝふいゆ源ゑいんの忌日ゑ御てゆち
つゝの如御まれゝゝの
られとゝ人の行あるといんとたのまん
ゆ一つゝの御ゆ　○なゝらて海ほとはうけ
まとゆきゝゝるゝゝんとゝにあゝ出して

一 ふちつぼの女御はたゝ[illegible]ばかりにて
なん ○月のすむ井をとりけてとゝもに
この世界のことをやとゝん 西行 御門の花
○大ゝ[illegible]ふつけていとゝまいらせの世界
をもさゝつ屋花をしあけてぬらつゝの屋
糸を結びてをし ○なゝめの西のすゝ
かとゝろ[illegible]ますゝ[illegible]
金道の高野 ○あゝ世のるこゝたるなゝ
ゝ[illegible]の高野よりの流のめつらしき
一 八巻 花ちるさとこれはなんしの名めの

祖母の女なれおとなゝ花ちるさと行ひゝ
これゝして奇をを[illegible]ふるゝ ○花ちゝて
忘を忘乃をれ[illegible]ゝきに月のかゝらひし屋
とのかさゝを 西行 ○都 公さとゝ[illegible]
をれゝゝあれもゝゝ[illegible]月 雨花ゝゝ
ゝゝ[illegible]なんし奇を添てゝ[illegible]ゝ ○あゝ花乃
ゝかなゝかしゝゝ[illegible]ゝ ○花ちるさとゝ行てゝ
世界花の巻乃名を花ちる里とゝ 御門
○人ゝなゝあれゝゝ中とゝ橘の花をゝさの屋
まとゝゝそれ これゝ[illegible]ゝ巻人名乃

の大將をいさの花ちるさとの永生も惜しむ

一九卷　次に八月のはじめと云桐壺院御門出かゝれて
朱雀院位を讓給ひ弘徽殿の后
きゝし　九月を書てふくこまいりやうの所より
朧月夜の内侍の方へ桐壺の御門とまりたのとゝ
いひ出給ひて　すゝ山なりとゝ
つゝ給ふ所かれ出給ひ　位を
給ふ事　天子の御ゝ入ゝ
大内裏れんてゝを

給ふ　されい白紅日をつゝ如ゝ
紅ゝ　この事を
をてあつらへ
おらん又いつたも
まゝ世ゝ思ひ
給ふ　まこれ
せん不論の行平の中納言の跡と思ひ
まかゝ行ん
よ給ふ
さるかゝ内ゝ京

いと海こひの西かよ方こへ行給ひて二条院より
設仕の大臣うこへ行のひく久雲殿大将の
うつくしきとおらんあるそなこりとおもこまるこ
主殿御方へ桑文小山の古院の北のかへ桑殿へ
こ海いときこひなりきあやひの上に御兄
林鳥中将すとく桑殿ふ沢まへ見んし御おも事
をかなうしこゑこうとたかせり紫の上いたいとよ御見
しりえるれらく思ひをけき入院庵の
上てよりかくして涙とおりしかへきりんし
見殿ゆへやるうてもすく思召給し給へと

○身をかくてさにしらひぬとも君かあくるまさるね
かくこのうけいそれれし　紫の上の歌し
○つれてもうけうると海る物なう八院とみても
あくささやせん　さて世ふゑひの上れ世大こやへ
りんけ　○とり海山　紅葉ふれてもまうふやと
海士のしたやくうつこそ行　大こや御歌し
○なき人のこりわやいとと海てらんなりとも
りし雲井なうれそ　花ちりて里の方より
見んしへいと海こひま　○月のけ路やとれの袖夜し
せくとまとわてを見んやあられ日かりそ

洒落し　哥んし　○行めぐり猶あすも又三日月
かけはなれしをしまらん更なるかやて　朧月夜
の内侍のきミへ哥んし　○あふせなき言の所
よそへつゝしやなるゝ夫婦の文しめすらん
洒落し　内因の上　○なさけある川ゝふしねをされ
ぬるし　なかれ　浮世をもますらく
又古院乃御きりへますいつますゝ入道殿やへと
系図へ尤能る乱めんあり人臣のミや
○兄しきるあくあるハそうれ紀世のそてとそむし
きりひもなくしと娘ら　洒落しなん

ともれしよろあしきことはつ能ふしにまるるて
この世にさいはまされる　又水山の父乃御基へ
系りゐふとてかゝ歳能やの千ころと尺ぬへし
御積乃日勅使に立給ひしおもひ思ひおもろ源
馬より御殿ハ右近の藤人馬とゝりてたへ
舞衣を　○むさつきくあふひかさしての
かことを思ふいつりしか歳の三かつ紀　なんしの前に
○浮世とを今そさりとてまらむ名とハ竒すす
の袂よまり　せう　父の御基へ系給ふの華
たゝり膚乃紀よ月をそへかくれしてゐ立

ふく心まを知れかし　古院の雨うけ入るゐ
ぬしてゐん　○なたらけやいとこるらむ
よるくて流れの水の音うれぬる　入まを
まいりて花　○いつまきまを　の松の花ゑん
と知らしまつる　賜ふして　ときうしを
ゐまをまを　書状をいつ所れ宮をとられ
ゐふ所也王命　の御ゐんし　まいりをゐる奇也
ゐん　の姫ちつぶの御女を　合せしあの
姫ちつぶとなうたゐをとやこ　○さたうく
ちうらうをれと行まを花の松を立ゐよ

紫のとゐんし　○いと有る詩をうれとうく
ちさまていのちとゐんよかたうをれのう
ゐ　紫のと　○れしうれいのちうく
発のまゐたつかれをとうしうちわてしれ
うれを京といてんを　方世方いとゐをひの
ゐまを也ゐん　○かうゐまを名をのこしゐる
人よりも行ゐ　ゐうれ家花とやせむ
芦を楚原の車こ　中殿ゐまをすまひとせ
しまをいく流ることれまをたらふんこ
一ゐん　ゐをゐと思あう　○ふる郷をこの

なきを海こつとも源ら氏はおかし雲行ら
一ら氏 源氏へ於ら海ものゝ入道のミや〳〵源
氏○まつ三まの浦土はゝ地こまやもいらるん源氏の
うゝ人はゝうこゝ　四侍のうこ
○ゝり源氏の浦のえゝうゝをゆゝうしたゝまやく
浦土やいゝ思ゝ　源氏源氏ゝて行の国松の松
をゝして すゝ源ふゝ れゝも色ゝ松と極ゝ水
のゝゝゝゝふ紫地色水立石色ゝゝゝて
ゝゝゝゝて源了相者ハ源ゝゝな
ゝゝて行平の中納言のゝゝかゝれてゝゝゝ

家居いまはりひいゝゝてかゝゝをゝゝ〳〵ゝこゝて
ゝたゝゝゝゝ舟ゝゝ相ゝゝきなゝ松ゝゝと
ゝゝ源ゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
源ふゝこれゝ紫焼と云了源ゝゝゝゝゝゝ
○山賤の居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
無ふゝゝゝゝ人一六条院御島源いせゝゝゝと
ゝゝゝゝ源了
○うゝゝゝゝ伊勢とのの浦と云ひやれゝゝゝ
ゝゝゝふ源ゝの浦人　源氏物語
○伊勢海やゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ハ秋か飽けり名を　さてわとすくな月はなりて
名月のけふさあかに物さひしさのまさるや人
待らてうらともまいらせ給ハつおのく　見ハ名ともに
あらと名付けれらむあまてるこゝとなりし
名ろさ給まハわと申く又秋になりてさしわき
に秋の名衣織にあつしかきいろくつまくに飾らう
物せ給ふ琴と汀なくさこ給ひ奴又あさる
てかつらとしの表に始るこれハ二年ゆかり
なすてに表すれハなむてんのさそくもさうふ織
ぬらん一年の花のえんすとわのひいてく

○いつとすく大みやく人の恋しきよさくてうさしはふ
ぬ来よ名を　於乃中将次二月下名よ
多いめんして詩を作り哥を詠すくさみや中書
上給ふ附名け　○娘ら哥我いつれの表行て
ふむこと山しく花ハかつるかりな○　ゆ此し於の中将
○あられくまうりれとこ世よこうもうれい花のこゝや
こゝよ道やまよいん　さくふろく於の中将よいよ
くるこゝを於あしこゝろこゝとるりして名付
○雲ちかくとひかふ田靏もこゝまつんよこれハ表
日晴るすりな紀氏と　ゆ此し中将

○さつまの花堂井上さとりさとりなくなる
しとと出つ一その年三月三日より稽古
こめよりけり　浦ちくあの人俳諧面白くて風
流次浪高くあらしこと　帰りて
○ちくさしし大海原なるれ出て一ちくなる
相いかれしこと○八幡神社と思ふらんたかもの
はこのことなられハ次ちくゆ一年ニ
まれく
一十巻　四石の出ハ五の出ハ俳氏故なる次ち
ふすこ行ふれよ次ちとちくこと又この出ハ

次ちよりあらしきこと丁こすふゆくあらしと
なく一次ちてけり　三月三日より稽古
ちよりなりなりてけしこと　出ハ次あさひ
しられいけり　何ちるいん会ふるうれなあ
ひぬんとこのの村ニ　さちる芳とん語
いこ事ニ作しこと　ハ海せんとこ会も
許ちこよこ海ちていくあんと思ひ
ちくいちれふ　故二条の院此条のより
とてあしこすちるこそあら条こ会と添
てきいくせのふこ故も面風をけしく次ちと

神ケりるとして[illegible]とうさう多るやうこ
ゆくうる事にとて大内ゐる仁王會おこるかれ
おきさ〳〵さ海〳〵ふ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
いろんや四会のうる[illegible]ゆまいあるひやうまいるる
とあるそし[illegible]ゆ[illegible]
らん思ひ[illegible]神うちぬし浪海るたろ
長江ろんしの[illegible]○あまるまた神のうちは
かく所すいろの[illegible]とあるさ[illegible]ひあま
一心ろんゆ 龍宮と自乃うてかくのと
く自風をなうしとも此うとようてうち

すとろこのゆくいは古院美のうちまてたとりて
ゆきうてのひうる位古乃神 地恵よたの海と
さらむとゐ同をあるとうんうる美さめぬうくの
ふとくあるれ[illegible]一路の人道そうまれ自己
ふそろ年 之帝んさむや さく次の年の
春三月ろかさうふまと住とはむうは糸り
我ら味路石へ[illegible]ゆやうくあらしまゆ和と仏
おきまいくせうくまて古院乃浦と云
と美のつけしゆあひしとたれゆめしあいせ
ゆくてあうしは人乃もよろとひうくむろと仏り

やり水をし小柴垣とをつらひいるるの
庭よ木を植て故のていもあるに任ぬ
ひろう去りるよりありしの入るあるし（むろい
なる年三月十三日之四月よりあるる文永の元
懐かしうこられるこあるる時分琴を月
琴にはありしの入るも所にさし笛と今御酒
なるすすかやさのの琴とはあるしの入道
上るこ琴とりなり　清水ゑ落さまひるる色
八女の五別るるさとるりと行ることる時入
乃我ゑむるあの月るる琴ととりるのたか

せとるふこ恒とハ報屋して戒の法ふこ
さの入道むすめ此おとこるとハ屋の風流とこ
ところよ恋まひるせるるこ猫娘なれ恋
さこてこ恋かこ是ハしさの屋此風流を
ありしるすこしへこるるこ誘こあるしよ和ら
のるる分金分此　此ゑと此　法ふと此
こ入道とよるこひかこ恋心ハ年よ
永なら恋ゑあこ法こ　こるるる
保氏ハなくこ屋此屋恋ハ屋恋
一業のとるり所ゑこあるも　○こるかるも

思ひやられてさすがに涙ぐまれたりし
つゝしゝ　一あらしとり淡路潟とか
なりあて御前又　○あくとゝろかのしの作品
それさへのこゝろ　すあり歌の品
あらと紀あらしも入道　○えとり物
君もこゝろきやつれと思ひわらしの涙
しさを　出て　○謡ふ淡もこゝ
ゝ　さよあらしかの　○菊のまこゝい君と
むれそす　あらとれあらしの入道のすあ盆
ゝ碩麻のゝたいゝろのゝをふれるよか

○ををもちゝねをふなゝめとひたかし
やとの楫とゝとふ　出て　我を入道
○謡むらん私すしまとるもれを思ひ乱
しおりひなるへし　まこの日ゝ入道の
娘の方へ　○いふをくをしをとなけくふ
やよやいゝとゝふ　出て　娘
○思ふらん心のゝとや面よいゝまこえぬ今
きくゝなやまん　先ないまを名れめん沿
いたしてのことをきこゝろかくのとし
てなる馬そゝよれをわたま　ゝ形ふし

旅を悲しくおもはしめやすらく

○秋の夜の月ひの的よ我のこゝろ迷ふ事なかゝ
者よと記の君まつ人も　　私用なくとも此的
なかめ侍りけるとくのさゝして形
くはうしのとのゝかよひ路にて侍
入道車とつゝうくまいりてせられのかよひ
琴をくゝりてあうしのとて抱ひ侍ふさて
六月のひうかのとの懐妊あるとゝ北御子姫宮
ゝ侍ふ国司　院の所よりゝ侍ふ
を年の八月白河殿ゝ一源氏物

より四月十三日ゝ雨風とけ
しくてこゝやこゝも国とやこゝまなれと古院集
崔院の宴ふ見へ侍ふ大国乃て十ゝの
ゝ侍ふ
門をかしこまりおそ侍ふ
ゝこゝれらんかをこれとれ宴ゝさゝかと云ゝ
門源氏を源ゝ
宴会侍ふこれゝ
ゝ侍ふ公ゝ大臣
あゝを八月ゝ

八道車と云て遠くのやせ山の上に
をりとおしこめるみち絃なりしの事
かなりなり 此たようあるしとりあつめて
三年なりあるしのうへ九月 名所の奇を
まねるもの ○此元禄あらとうとうと廉しく
やくそくりはれしうよりひん 此山 此
○かきつめて海上の中しかも思ひもよらぬ
うたたよせし 九月上旬あらんとそ名
弾よ管絃をしてなりもつ持のふ琴を弾
石のようまいるもの 此あるしのよ ○うをさそよ

たのこれかりの一ふしをはきせれ祇やけて
志のうん 此山 九月 ○あるその所見よ
賢分の先をのもら一ハさとよかるさそなん
於へ立まふ ○うちすそ
多つもかなしき浦浪の名ぬいるも思ひ出
此山 あるしのよ ○とし海つる岩やとあきて
うれ波のつるうるやあとまて まさ
岩のよ九月の御ちあると知らうさぬのすそよ
むすんなまつ ○ちる月のうかさのうるたび衣
ちかとけしとやへのいとうん 九月 ○かうこうも

ふしうるあふことの日々をてん中の宮をも
ぶさらあれいかゝしの入道我ゝむすめ所ゝつゝく
御なりとおもしこゝやさ○人のたやの心をやさしの
ら給ふもゝとおもふ道ゝすらひるゝの心こ
源氏も入道ゝるこゝろをたしこ給ふ○こゝ所こゝ
まのなけきゝゝ玉ゝゝめやとゝ酒をとゝれ
ぬる秋　一八月都（邪）へ出ゝて源氏殿の事を
とすれまゝつきのゝ姫ゝをれ
ゝふゝ話とあれいかゝ（カニ）年日のゝゝなふれまゝ
のこゝろをゝく給ふ　ゝと年日のいゝこゝいの旅とゝく

一世ゝの事ゝとゝ給ふこゝとありゝ小松殿
石ゝゝ上給ふこゝくありしのゝ上ゝ給ふまいとゝ
紫の上人ゝゝゝきゝてのゝらんとおもひのゝて
人のいゝわさゝゝゝゝゝめしゝれと物語り
おしのふゝあゝし姫入道ゝゝ合ゝゝ
姫ゝゝゝゝゝゝ懐妊させ給ふ事かゝて
給ふ紫の上一の給ふゝゝゝゝゝこゝ目出度
給ふゝゝ長御ゝゝこゝ姫のゝゝゝ
我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　十二月風の吹ゝゝ
のゝゝゝゝゝ紫の上のゝ

乃ち円覚院の居なし給ふを
一上洛あるべき二条院へはしらせひらきまつ
紫の上ふかくなんあるとて三年の初の物詣
まうとふねあるべしつゐの所もそ夜
ものとも思ひてよろこびかうりなりもの先
ありて糸円覚院一つ天子の御見とふよ竹を
居もれ美想のつけとやう又西風の逆事なとお
かしめし給へ給ふれ一しかもとやよかいつく
ちひてあんをくひめつりいるく出物なきれ夜
よ入ぬ八月十六夜之名月　○ひとつとうとうとう

うとうれ蛭のみれ芝にさりし年八つより
心をいさ自己の芝四人の御子の体と蛭見とく
いふ絵ふるつとを入るく御入夜之去ふとく
我もとうとうとうとう三年のうるはしも
たるたの形こうたるたる今のしかされをこし
ふつとを心さん芝と　○又世をいるわれと
思ふらん三年よりぬあ毎すしてこの心を
御門仏五　○高松の方のうりはひぬるとれしはれを
とうれしまをたるこのこすを　ろをを元との位
自分をつとめと大納言をそ位とうれ給ふ乃を欠

八人あれハ八つまり五人負のおれハ大網ニとり
なりと大網ニよりやうて四人よりハ四人ハ
ハれ四人ハ三人ハ二人ハ一人ハ
ハ拾本ハ五本ハ三本ハ一本ハ花さかせること学
花よりおこりのもの さて君ハ御通せんまく
長文 御伝の系 法華院の御手 まんせんあん知ものたし
またれよりハ見してそうしあるこ
長文のうへ 色ハ黒ハ白ハ黒ハ白ハ
よりこと御なり入道もよりこと御ふこ
一おりしよりおくるこうるハ時のしの上ハ寿

○なけきつおりしの浦の朝きりふ多つやとハ人
と思ひやるれ扱ハ相つかの御ことハ文三年
多ものて崩御のなやそなるこれ御ふ君御法あ
れハ寿三年也古院の御あふ法花講れこな
れ御ふ

一十一巻 深（ミヨウクニ） ハ小さの起ハ尼 次ハ尼なの
ハ紀風ハ丹さまし くゝ文 愛想の出ハ出ハ
しハ伝ハ古の出ハ林の出ハ出ハ出ハ
と御立ハ御立ハ御立ハ御立ハ御立ハ
ハ丹さまし 御法ハ

しと云こ東とも云て笑くし紀かさう先強(セク)
色角ゆとりなしあり上の上も表秋こと
心行詩のこゝろすこし系統ふ雅俗の俗
まそれ和とつけそれ人へ伝表上東
なと笑こし紀行ゆるふと和ととゆくしゆふ
よ月の四方の俗系とゆあり の上五色
ときこしめしあしかりけりとて家ゝて
拭除(パライケテ)て神ゝとし行ふとき例の心きこのこれ
うよこれとゆゆるふあり此上のれまいりと
中世ゝ上奏しゆ年俗ゆれと伝ゆ出つ

やうて心行ゆて拭ようす東領の筆とれあくなし
月ゝ梅ひしゆれそとの行ゆ心ゝ ○ゆひゆれい
今ゝおゆなふ角を拭ゝてもあ
んとゝ云ふと云 ゆ領の心さてゝんしこう
れゝゆ角たゝゝふ ○ゆ行ゆ一直ゆる
ゝるしふゝまゝとゆゝるゆひゆる元ゆしふゆ
あゝのよ心ゝし ○加ゝるゝてなふいのゝと
ふゝるゝにゝなよ角と拭ゝ思ひゝゆゝん
此巻と角とゝゝしゝふゝこの寿ゆこゝて
ゝゝよゆ対角ゆれゆ此巻ゝて内若の炮ゝゝ

生れ給ふと

一此度のたまひは蓮生国房とゝ二度ばかり
蓮生と云いまの此度のたまひは来擂花常陸
のゝ国の女と上総ゝ国とゝ一度設て
見めあしかれい直舎有り花ちるさとのれとも
ろへゆさ給ふとゝ見んなへいうみはけれとゝこの
ゝ国やう設給ふれ記さちのむすめのまし
国房とゝ見んさるふとゝ思ひ出蓮生
ちけり給ふくしてゝ人のゝふていもるさとゝ
ゝ国ゝ花かさしゝけ意ゝさゝ入給ひて

○さつゝ○てもゝ見れとゝいめ見もなり姫ゝ花ゝ花ゝ
ゝ心をゝちゝ二条院ゝ二条院ゝ下ゝ見ゝ
又ゝ二条院ゝ移てれさまゝ設ゝ人
倫給ゝおゝしゝゝこの姫ゝの乳母ある西
能ゝ見ゝ積ゝ見ゝ乳ゝまゝゝ設ゝ乳
母の乳ゝ設ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かさていとふゝをまれふて位給ふとゝ見ゝ
ゝて見ゝ設給ふと

一冷泉とゝ幕末のたまひの宣旨伊与勅使
ゝ伊与勅ゝ記ゝ設ゝて国ゝ宣旨

をつれてわたらる文上洛する時雲隠とつれく
義こし侍ていみじく上とに源氏相ふし在世へ
宗旨あるに古哥の字みなく侍る助々の和るにこと
行発心侍ら助ハらんし　とへ奉りまいらせおそれ
てかしこまりて源氏小君殊めしつく
○見てえに行めぐ道とたのこしハ粗かいなりや
云示そるれは文　○行　とくとせ給とめりさき
侯とも後々清水ハ人やみるらん　音とをし
行ふゆへて写やと云也

一十二巻　絵合　これ巻と絵合と云事ハ時の御

かと絵のすぢゑ絵とりあつめ御叡覧ある
あひこ君の御方へささとて色と合なされて
おの御門なされハ桐壺の天王の御子と云后
せらも源氏の母の子也これ御方と位の御つ
給ひて給事もなんしの語すこし朱雀院此
御子ましますそ古院の御遺言にて冷泉
院位にハ給ふなり時の関白とハなんりのせう
との大臣そら給へり此大臣のまこに又の中将の姫又
ましまれと后にそそへ弘徽殿の女御とやこし
趣るきされとそかくしやこ　柏木の右衛門　此妹こ

一世巻ふくいせ（下略）ふ無宮ゝ朱雀院のはるよ
なりて大極殿にて御とさし給ふ物ゝ無ゝ
ものてきし 南殿を御息所同心して上流し
給て（私云無ゝ秋のすてゝ給ふよい月水よりなり給ふ）　一 冷泉院給の
数寄なれい秋好のちゝ〻を給のとて源氏
給のとて御門とれ法とあそてをこ御門の御
このゝなれい給合なさる つきとこ比ゝ三月十日ゝ
九右へ押上げ給合給ふと紅秋好の中ゝ弘徽
殿とゝ花のくゝ三人て女房ゝ出て冷泉院の
ゆゝひさしてゝ右をゝ合給て御の北判い

無アゝのゝやゝ九乃御代宮ゝ舟の四位出給て
こゝきゝもんの女御右の御代及ゝ内侍ゝをを
出給てんい大臣ゝまこれれ大臣と
の方より秋好乃中ゝ入ゝ御ゝるれい
源氏の方ゝこゝきゝてんの方より 玉照君揚貴妃
の給ゝいゝ給て揚国中ゝ女揚貴妃ゝ玄宗へ
系給へあまりふれてゝ政をゝてれ
給ふれゝ安祿山ゝ謀叛とおこして揚国中を
打死揚貴妃ゝいれて馬嵬ふてゝ給して玄宗
ゝいかゝしゝ月ゝ給へれし こめておき

中こゝ此事も根ふかいしてゝこゝ人しう王照君
を胡国の蠻小恋欲かきり　すて　て法とも
なりかくのごとくの法々れたそしてくあれ
ま見るめこよやめ法了源氏の秋好姫中宮
より竹取の翁のかいこをえて来れる絵よ
うつくしさ姫と成と所姫とゝふこれと君きい
しめして京へめされし法をおせりこれいなふ
事なれ竹取の翁とて富士の禁(ノ)よ竹夢の翁の
河るゝ翁のまり　れしらかいこ姫となりて日りり
かてやくなり勅使さこちらくこやこいさるひ法ふこ

これと御門居ふを乱こ法ふこれ欽明天王とゝ
はゆ又帝とゝて富士の禁よ海ふ君名物
を惜恋慕ふかこれより富士ふゝりれ之
御門の恋ふゝり也ふ姫を乱ゝ富士の煙間
大芸薩仏右の絵ゝこ又ゝりは伊勢物語
の業平ふゝひ法を出せり此法を伊
勢物語さて大神宮のていとかく歌の
なり記ふまあひ法ふことゝくいこの法ゝり
又ゝりゝ年　次ゝ竹取ゝ年　海ゝ時ま
ゝ　のゝいとまれと書遊ふゝれと

三やこへとちらくのかつをゑさうして人まも見せ
給ひたこれと伊世神宮の尉尚よいこせり出る
右の猪之次二郎石の袴のうゑ二つ之の猪乃うゑこと云
給ひはされ紫桜上の
なり紫桜上　○ゑとりみるすけさしよりハ
海士のすむかさとう紀くそ見之かりる出て
ゆん　○うゑめえしゑ松りよりまるふるまき
すきこしかこまうてるなうこか

一十三　松風　兵庫頭源朝臣
あかしの姫君と三条の成給ふ時遠はかし

京へよひのかゑ給ふ之のとき京へ西之八そうり
松間けしかのかりしのとも毋のあま君大井川也
丁志かへ之のさとに仏あるをたこれる松さまん
らせへしくくゝ始る紀ゑとを西ゑてしたさまくせ
給ふされと給ふ紀ありしも人道なこりを祈
こまる事かこうるゑ　○彩さ紀とそうにいの
ゑうとれちふこれハ老の涙なりるあま君もあり
のとも若君とのかゑせ給ふをいと　入位なこう院
こ給ふくわま君（ケニヂノオ也）の方へ　○とうとも小弟ハいてき
このさひたゑ之とりの中之道やまとりん

あるのとはかり　○いさてすたあはしもむとも
いつとてらかきりをとゝ遠をたのまん
さて世のうらの星よかるゝ夫れとゝ松風やくと
きゝゝ尼君のうゝ　○兎とうゝゝ乙とうかゝ
古代ゝきゝしまさる松風をふく世うゝ
生とも名ゝ　一あるのとはをきゝ
金明親王として酬酬天王の王子乃ゝむすあ
ゝのゝ入乃ゝ桐壺の更衣も伯父ゝ入ゝ
の名ゝも伯父也ゝゝ桐壺の更衣のゝ
これゝゝゝのあるゝいとこゝれをゝゝゝのゝ

ゝ母君をとゝ北地の星よすゝ海ゝゝゝあゝ
しのゝ姫君をまゝけてゝの星ゝ生ゝ妹賀后
ゝ錦をきて會稽山の邪ゝかゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ入道母ゝ名ゝをたゝむゝゝ
○彼岸ふゝゝあゝたゝゝゝむゝゝゝ
ゝゝゝゝ　ゝゝゝ○ゝゝゝゝゝ
秋をゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

○いとゆゑあるさまにもてなしたまへり

すれしとをとゝ[illegible]

一けんし 樓のさとゝふ堂とて物しく奈[illegible]とて

[illegible]のうへのまゝ 西にところ〳〵こらすし

[illegible]りかくのとくくしてはよろしからぬ[illegible]とい

先樓のたまいそせて姫君をゝ二条院へ入

まいらせたまふこそ[illegible]れとむつさにのとゝ[illegible]

[illegible]り

一十四卷 藤壺とゝふいまゝのとくあるのとを

八樓のおさまりゝ[illegible]せて姫君をゝ[illegible]

[illegible]

乃かせまいらせたる紫の上のよふすを[illegible]

女君むつかしとつゝ[illegible]

こうとおもしをとゝ[illegible]

それにまた[illegible]

乳母達のかをる[illegible]

しの心をとゝ[illegible]

姫君車ふめして

○丁忌をとゝ二条院へ

[illegible]

なる女をとつれて小京の大納[illegible]

○大原やたしかの思ひ出ありてや年ごろかれこ
よのうけこむ　この心ゆゑ国しずかと祝ひ
私云大原の大明神はもと源と名つけまこれ福岡乃
大宰帯陸の国司ゆゑ氏神麻績の大明神と号
北京へうつされ其日の明神とかこ福岡の右宰相殿八幡宮
氏子殿ゆゑ天王寺ゆゑ女御と成りはなはだ
茂原ゆゑ藤家の元祖ゆゑ茂原よりて大獄
成ゆゑ京へ帰京へうつる
長恩の宣旨ゆゑに国裏と造り移し祭ると記書
此明神を京へうつし大原の大明神と

この京へ移しまつる又右田へ所落ゆゑ右田の
明神とかこ　一代巻と所望といふことは桐壺院
御門の思ひ人ゆゑつかの女御とうやゆゑ日のこやとか
御子ゆゑ前御代はは入道のこやとかこ所望
所望とかこ三月晦日より御陰あり冷泉院十七
ゆゑ位ゆゑ身病ゆゑ国母ふくまし海住寺
女院の宣旨ゆゑ所望ゆゑ栄花巻
位ゆゑ俄ゆゑ出来ゆゑ六日ふく御陰ゆゑ
御子十六の時ゆゑ女院の二十七ふくかれ
病ゆゑの居の時ゆゑ

やさしかるこそあれしの御歌と見えたりともあらんよ
むかしの御ゆかり給ひし人なれは聡歌中もなり
けしきて女院と鳥部野へおくりまいらせて後も
御衣と志ありけんしも色をめして御葬送のてい
雲のそれなれは天気も薄くかすみて雲の見かけは
山のはすゑに情よりつゝも薄雲さらさら入日のかけに
うつろひけれしのめしたるいろの袖よりつ
るそれと見給ひてよみ給ひける　○入日さす峰に
たなびく薄雲は物思ふ袖に色やまかへる
この哥ゆへにこの巻をうす雲と云之又これ女御

此御名とも薄雲の女院と申なり　一此巻に天下
のさとしと云ありて薄雲なかくれありてのち雲れ
なしこゝもすさましく月日のいろもかはりれ
大内よもひしこゝと秘かしめし祈祷ともあり
なることは薄雲の女院よは弟なれは后の伯父なれと
横川の僧都と申之此僧都御門に記そらに物かたり
申給ふにや世の中此しこきは道への子細
何ゝれにまことは世さとしとて又ゆへは忠国と治孝と
以讃家されは大国に西伯将と云し紂の紂王
とうもんとて度々兵軍記といへともかれいせとこれ

せんとの武王のいくさにむかう事と軍を発せしも
又のいとまなくせんはるるそしらん父の敵を作く
事よのせうく大将として下にのる軍を指揮せと
河これ、者ども、の忠なかるとつて事うさて
堯舜の国出現の御代と孝を尊し世を治る
ためこそ今此天下のうしきは君の不孝ましまし国
ゆへなり天のあらめ給ふとこ君大王をあひ
給ことをさふらふの給ふこと信られかたし君の法
親をそ思しまれとも天下の孝を重ぜふと思ふ孝く
とも治ぬ者をうかがうは臣下のうり

この事と知給ふしとれかせ給ひられかさ〇養
し給ふつらゆけいの命妨ふれ寄ら給ふ事
しとのの〳〵ふ〳〵如とあし て給ふつあれを
ことのよ細ひをもはすしるやとうら間云給ふと
たかしめしつさて次の日ひむし 御系図をれは
位よつき給へかき宮ふん 弱るく辞退し給ふ
すてよ倫云ハ汗のしく〳〵れいやうてくみり
分給ひく村上の天王とやこさて国院とやこ
朱雀院の御子ふんしのれひ也わりしの形高よ
合我られ幣よなし 位と譲ひられ大上

法王よりたまはり給ひ宮殿おかこう給ひなる
一 仙洞より上洛あるべき御皇位の位居のところ〳〵年
月給ひて其秋中間よいつれの所にあらるべきと
給給へいつれもたまれとも其まゝ経ふしてなを
無あるを秋ことにあるべ所秋好の中宮より
申 ○君をさそあられとかをせ
人忘れぬ秋の色もる秋のそらの風 一あるしの
上と申まいらせて花さき給へい枝桂の星はあさぬを
思ひ出るゝ ○いさうせ忘れぬかうの夫を
見ぬ浦給やたゝひ来よるむ 御返事

深くぬるゝの思ひ出るゝ ○ものとうの
なけるさいるゝ 一 源氏物語ハ三月廿三日明石
御出家同十三日ハ紫上ハ十二月学
ゆえしかの七女のおとこ
一 十六巻 撞(アナカシ) この巻とあさうのいふ心ハ清和天王
貞六王子桃園式部卿親王姫宮また
これ加茂の斎院ハ備後ふ加茂まうゝ斎院と
云也加形ら親王の女御なと備後守ふ加の
式部卿の姫宮やうゝ 心をうけうゝをはらて
寄なくとせ給へて心はようて ほのなくハさぬ

女院へ参れ　○人忘れぬ秋のかくこそまち
しるるこゝぢつれなく世をすごしなな　式部ハ
女院の母ゝそのふすまの内にあるを見て
あれいかゞ我よりたゞ吾る桃園の殿
ゆとまいりて侍ふ時に
そうとゝふゝ侍ひし　○女院　○るゝ世のあれ
あさゝの花とれりゝまいりて○見ゆるの
家わびられぬ撞のゝなれさりやすらやこぬ人
宮　女院　○秋ゝて　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
ゝ侍ふ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ

撞と云こ又ゝ　○つれるさまむらしにゝるゝ
心こゝ人のつゝ侍ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
心ゝゝを

一十六の巻　乙女　この巻を乙女といふ名ゝ
ゝとゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
ふゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
心ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
ゝ　○乙女　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ
ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ　○ゝ

世を乱し女と云也此五人舞姫○かけろいへる
ふ様なるをおろくなる日新の宮も神とはけも
一此巻より前の時代なる時代なると云る大内より出たる
ひ給ふ月を宮月なり大内より出たる月
女房の天女のごとくなるを撰る舞姫より立給
ふ也源氏のまつりとなる勅使之これ
うつる娘とよく出立せるまひ姫ふあるをうりをと
源氏のれるよりも雲の大将天皇ひる心とうけ
ゆくよりまた四侍の外しつる名付るめしつる
うつ世女ごこのうつよりあまりそのうち

葵北上の兄弟中将雲井雁父之此中将のち
の四大臣ふ成給ふ之也をハ致仕の大臣と申也
后の姫ゆやまし一位后腹ふ為人有父の心よ
ものをもへまいせむと云ひ給ふ之夕雲井雁元服
をうさうさ雲井のうつ十四をうをうひる心を
うつ給ふを父の大臣江深うをうをおよれをあ之
夕雲を雲井のうつも心をかよひ給ふ彩
雁の鳴うことを ところ給ひ姫君 ○さよ中ふ
なよひうをうかりうをいうをう姫君をよ歌の上
風此夕雲を六位ここの奇を詠給ふ立をうを

いよ〳〵悪くなりゆき終に父のゆるしあて
く舞を成し給ふと夕雲の御門に如何ひく
雲井のかりとなる又夕雲のうるさ○紅のなること
始めさ神の名をあさ尺とりとやいひ云れまつき
雲井のうりゐ西信なれいふれるひく夕雲六位
地位なれいまさ尺とりの神と の雲井のうり地
めのとゆ雲をかて物のそしめは六位宿世いと
心底さなしといひ〳〵とて給ひ〳〵此方と源の
ゆりはれいとうを地をなれも居と思ふなき
紅をなるれいおりし位と源給ふこは上て

雲井の居 ○いろ〳〵のうる紅見れかく云ふまに
いふとゆ給中の衣を 一この夕雲の御門ふ
給しの君と云もすまさまた之芝は朱雀院の
第二の姫みやなるとは桐木右大将の御門と此人
うせてのちは夕雲の御門よ如給ふ 一此
生まれうん 六条院と作り給ふことをあけくる
此を六条京極と四所よ掃ら院と作りてやむ
年なれ女房こちと是給ひ物こ地をとさせまいも
毎好のことく勵く作り給ふ紫のとは
地こを好給ふれよ此勵よ掃物を極めこ地水

き水の葉の雲躑躅歌にてなどと枝折ふ花と
東北殿と云これも紅葉す殿と云
ちる里の花とぬ折ふゆへよう色の紅やひ
牡丹橋の上と枝折ふ花を蘭と御息所の花ハ
秋の葉をぬ折ふゆへ迎月高筵に紅葉するとと
枝折り水立石なとして秋の野と云て花
又これも花と雨とあるとに秋好中宮より紫のよう
な葉のふるよいろくの花紅葉ふとこ紅ませてうう
ぬいうもぬ折ふ○心ふ人のそのハさうやとの紅
葉と風のはくらこいとよ　さて紫の上の

乃ふるよ苔どちらに家松よりて出
○風ふちる紅葉をかろ　雲のいろ
の雲をうけてふ　ふてあめ